

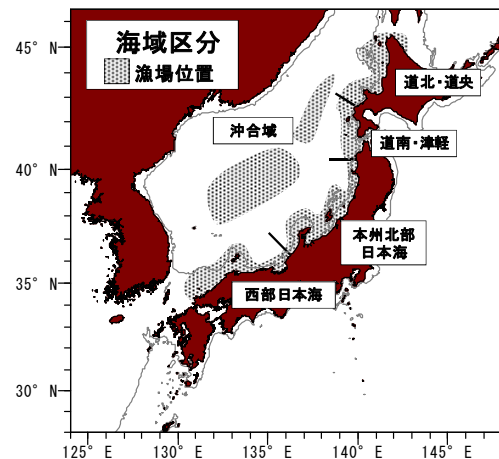


平成29年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成29年8月～12月)のポイント

- ・今期の全体の来遊量は不漁の前年並で、近年平均を下回る。
- ・道北・道央の今期の前半では前年および近年平均並。
- ・道南・津軽では前年並で、近年平均を下回る。
- ・本州北部日本海および西部日本海では近年同様、漁場が形成されにくい。
- ・沖合域では前年並で、近年平均を下回る。漁場は、北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に形成される。



* 近年は最近5年間(平成24年～平成28年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所

担当：業務推進部 加藤、江連
資源管理部 上原、久保田

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成29年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2017年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：今期の前半は前年および近年平均並。今期の後半は現時点では予測が困難である。

(2) 漁期・漁場：8月までと11月～12月に来遊のピークがある。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：8月までと11月～12月に来遊のピークがある。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均並。

(2) 漁期・漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成される。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 近年平均は最近5年間（2012年～2016年）の平均、前年は2016年を示す。

I 予報の説明

2017年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月下旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（平成29年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、および9月までの海況予報（平成29年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

本海域では、近年、7月～8月と11月～12月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、本海域の分布量は前年並で、近年平均より少なかったものの、前年と比べ沿岸域でも分布が認められている。また、本海域における6月の漁獲量は、前年および近年平均を上回った。漁場一斉調査による道南・津軽海域の分布量は前年を下回っている。以上のことから、今期前半の漁況は前年および近年平均並と予測される。また、今期後半には冬季発生系群が漁獲の対象となるが、来遊量に関しては、現時点では予測の根拠となる情報が不足している。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

本海域では、近年、6月～8月に漁期のピークがある。さらに、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象に11月～12月にもう一つ漁期のピークが出来る場合がある。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年および近年平均を下回った。また、本海域における6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。一方、本州北部日本海での日本海スルメイカ漁場一斉調査による分布量および同海域での6月までの漁獲量は前年を上回った。また、今期後半の本海域への来遊量に関しては、道東太平洋海域における冬季発生系群の来遊量が前年を下回るものの、道南太平洋～常磐海域では前年並と予測されている。以上のことから、今期の漁況は前年並で、近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本海域では、近年、5月～7月が漁期の中心であり、8月以降に好漁場が形成される状況にない。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年および近年平均を上回った。本海域における5月～6月の漁獲量は前年を上回り、近年平均を下回った。スルメイカ秋季発生系群の資源量指標値（後述）は前年並で、近年平均を下回り、近年の漁場形成状況を考慮すると、今期は漁場が形成されにくいと予測される。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

本海域では、5月～6月に沿岸域を北上する群の他、10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は秋季発生系群の南下群が漁獲対象となる10月～12月に漁獲が伸びない傾向がある。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年並で近年平均を下回った。本海域における5月～6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。スルメイカ秋季発生系群の資源量指標値（後述）は前年並で、近年平均を下回り、近年の漁場形成状況を考慮すると、今期は漁場が形成されにくいと予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

沖合域では、従来、6月～12月にかけて大和堆周辺海域に、水温の高い8月下旬～9月には北海道西沖にも漁場が形成されてきた。しかし、近年は漁場が北偏化するとともに漁期が遅れ、8月～11月は主に北海道西沖に漁場が形成され、大和堆周辺海域では6月～7月および11月～12月に漁場が形成される年が多くなっている。

【情報および調査結果】

日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果によれば、スルメイカ秋季発生系群の資源量指標値（後述）は前年並で近年平均を下回ったことから、本海域への来遊量も前年並で近年平均を下回ると予測される。漁期・漁場に関する情報として、今期前半の水温は、近年と同様に「やや高め」と予測されているため（平成29年度第2回日本海海況予報、7月7日発表）、近年同様、道北沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成されると予測される。

Ⅱ 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、いか釣りによる試験操業（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。

1) 分布状況

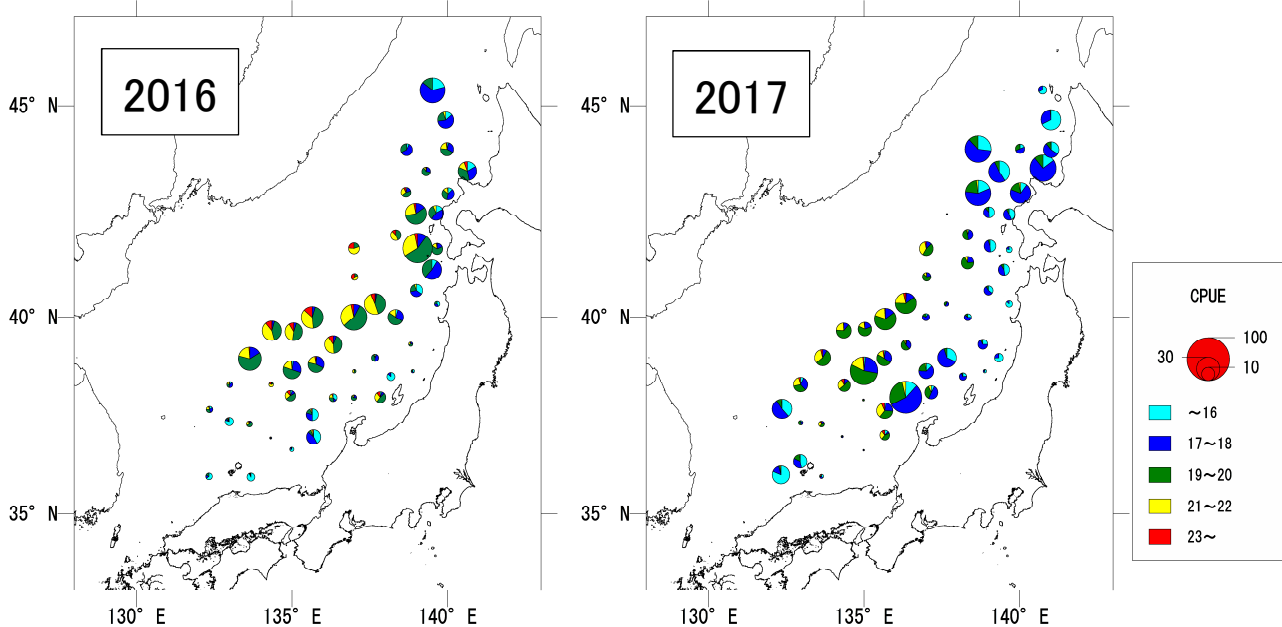


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2016年と2017年の調査結果）

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す

- (1) 道北・道央海域では、外套背長17cm台～18cm台の個体を中心に採集された。分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）は38尾が最大であった。
- (2) 道南・津軽海域では、外套背長17cm台～18cm台中心で、次いで16cm台以下、19cm台～20cm台が採集された。CPUEは36尾が最大であった。
- (3) 本州北部日本海では、外套背長17cm台～18cm台および16cm台以下の小型個体が中心に採集された。CPUEは能登半島北西で58尾となった点があった。なお、全調査の中でもCPUEが50尾を超えたのはこの1点のみであった。
- (4) 西部日本海では、外套背長16cm台以下の個体を中心に採集された。CPUEはいずれの調査点でも20尾未満であった。
- (5) 沖合域では、外套背長19cm台～20cm台が主体で、次いで17cm台～18cm台および21cm台～22cm台が採集され、他の海域よりも大型であったが、例年の同海域の組成と比べると小型に偏っていた。また、例年通り、大和堆周辺海域におけるCPUEは他の海域より比較的高かったが、CPUEが50尾以上の分布密度が高い調査点はなく、最大でも43尾であった。

2) 資源量指標値

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）をスルメイカ秋季発生系群の資源量指標値とし、これを日本海への来遊量の目安とした。資源量指標値は、1970年代後半は15尾前後であったものの、1980年代には低下し、1986年は2.76尾となった（図2）。その後、資源量指標値は増加傾向に転じ、2000年～2002年には3年連続して20尾を越えた。しかし、2003年以降は概ね15尾前後で推移しており、20尾を越えたのは2008年（21.06尾）および2014年（28.80尾）のみとなった。2017年の資源量指標値は11.89尾であり、前年（11.12尾）並で、近年平均（17.18尾）の約70%であった。

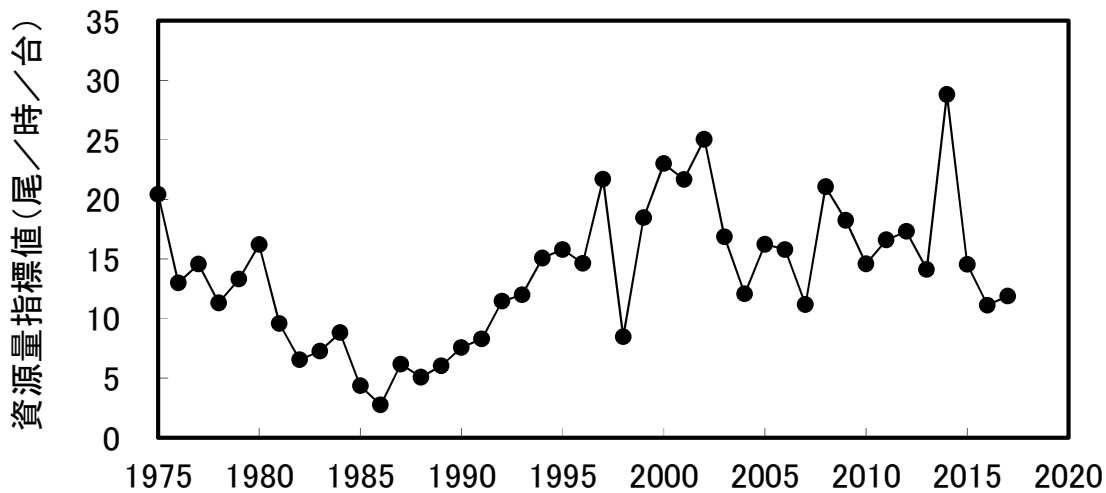


図2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指標値の変化

3) 魚体の大きさ

資源量指標値で重み付けした外套背長組成を図3に示す。2017年は17cm台にモードがある組成であった。外套背長19cm台より大きい個体は前年および近年平均より少なかった。外套背長組成は、前年および近年平均よりも小さい方に偏っていた。

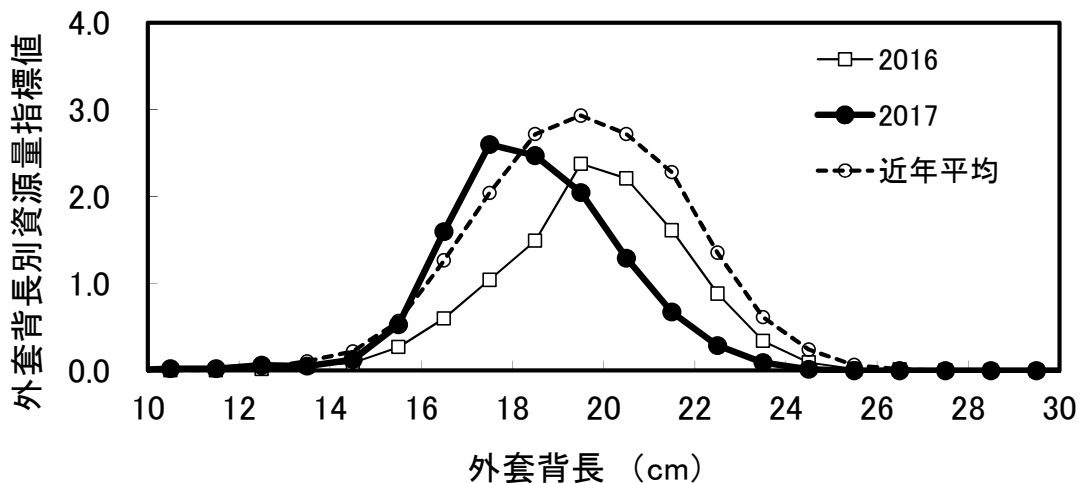


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す

2. 2017年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2017年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。2017年の漁獲量（4海域合計）を月別に見ると、4月まで前年を下回り、5月以降、前年並となった。道北・道央での漁獲量は、例年通り6月から増加し、前年および近年平均を上回った。道南・津軽での漁獲量も、例年通り6月から増加したが、前年および近年平均を下回った。本州北部日本海での漁獲量は、いずれの月でも近年平均を下回り、4月までは前年も下回ったが、5月以降、前年を上回った。西部日本海では、いずれの月でも前年および近年平均を下回った。

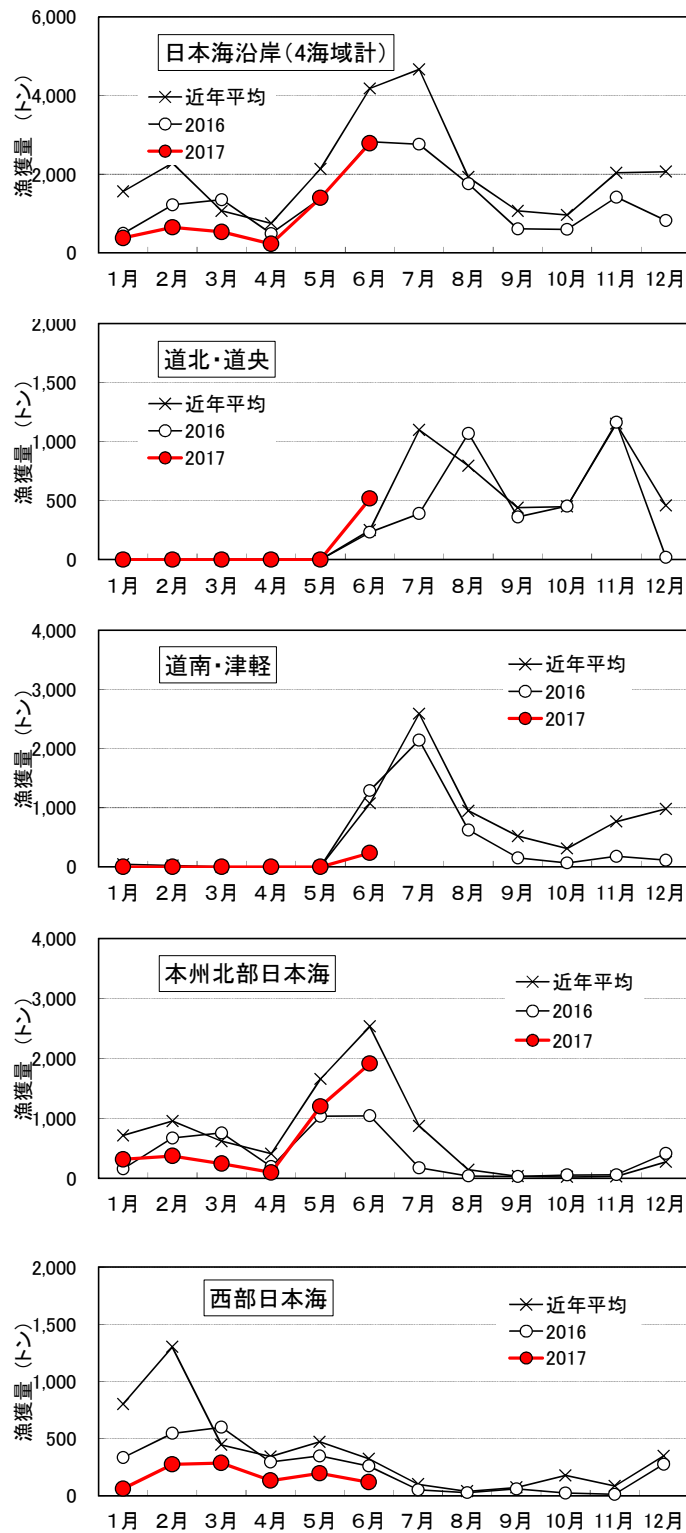


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成（一部未集計）

3. 太平洋側（冬季発生系群）の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊するため、太平洋側の冬季発生系群の資源状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成29年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、8月～9月の太平洋側への来遊状況は、道南太平洋～常磐海域では前年並、道東太平洋海域で前年を下回ると予測されている。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所